一幕

【1】

暗転

客入れの曲が終わり、真っ暗な無音となる

真っ暗なまま、主人公の声が聞こえてくる

どん、ご、ざざ、ご、ごろごろごろごろ。ど、ざざざ。ずずず、ずずざー

声に合わせて段々と明るくなる

少女、脱力したように倒れている。

少女の下には赤い布が敷いてあり、それが血だまりのように見える。

身なりからして、小学生だと分かる

どこからか転げ落ちたようで、体のあちこちに傷跡があり、服も所々破れている

が、声だけは不思議なほどはきはきしている

そしてその声とは裏腹に、自分の死を当然のことのような顔をしながら、少女は喋り出す

と、私が死んだ時からこの話は始まります。

初夏の昼下がり、友達のハルカちゃんに夏休みだからと無理やり外に連れ出された私は、石でできた不揃いな階段から転げ落ち、頭を打って死にました。

神社の境内、齢１１歳の私が５人程並んで、ようやく届くほどの木々が、まだらに影をつくり私の体を包んでいます。

少女が喋るごとに、その状況を再現するような音響、照明が施される。

いえ、「私の」と言うのはあまり正しくありませんね。だって、もうこの体には私の意識は残っていないのだから。

少女、立ち上がる。その時、布はちょうど人一人の大きさに丸められる

少女が寝ていたところにスポットライトだけが残り、そこにはぐしゃぐしゃになった赤い布が置かれている。まるで少女がその場所に肉体を脱ぎ捨てたようだ。

誰のものでもなくなった体を、包み込んでいます。

なんて、ことを言っているうちに、上の方から声が聞こえます

キャーー!!

ハルカちゃんの声です。私の友達の、ハルカちゃんの声です。ほら、階段を急いで駆けおりてきます。
・・・そっくりでしょう。私と。
実はこの服とか、髪型とか、ハルカちゃんが決めてくれたんです。
私がそういうことに頓着しないのを見かねて、親切にもハルカちゃんが決めてくれたんです。
と、言っているうちに、ハルカちゃんの叫び声のおかげか、何人か大人たちが集まってきました

少女、スポットを跨ぐようにして立つ。ちょうど先程脱ぎ捨てた死体の頭を跨いでいるような形だ。
そのまま足を踏み鳴らす
少女、嫌そうな顔をする

あんまり顔の近くでバタバタしないでくれないかなあ。ホコリとかかかっちゃうでしょ。
いくら死んでいるって言っても、もう少し気を使ってもいいでしょう。
なんて思っていると今度は遠くから救急車の音が。

救急車の音が鳴る

大人たちの誰かが呼んだみたいです
いやあ、もう手遅れですよ？ 実際。
私がこうしてここにいるんだから。

少女の体が救急車に担ぎこまれる
死体と乖離した少女にも多少影響が出るようで、体が引っ張られる感覚があるようだ

おおとっとっと

丸められた赤い布がだんだん開いていき、少女の服が脱がされて言っていることを表現する

ああ、ちょっと。脱がさないでくださいよ。服を。
ああ、もう。私もう死んじゃってるんですから。脱がされ損じゃないですか。
・・・ええっと、これあれだ。なんだっけ。ＥＬＴ！ だと英語の先生か。ＡＬＴ！ だとミュ

ージシャンだな。ええ、とＥＴＣじゃなくてＬＥＤは――――

少女、電気ショックで体が吹き飛ばされる

・・・ああ、思い出した。ＡＥＤだよＡＥＤ。
しかし、ビックリしたあ。すごい勢いだあ。ん？ 痛くない？ あ、そうなの？ 死んだ後ってこんな感じかあ。
ていうか、「離れて」じゃないですよ。こちとらこことここに直で当てられてるんだから。
うわあ、これやけどとか残るんじゃないの？ 死んだ後でも治んのかな・・・
うっさ、てかうっさ。
いや大人たちの声もなかなかにうるさいんだけど、ハルカちゃんの声めちゃくちゃうるさいな・・・

少女、嫌そうに耳を塞ぐ
ハルカに何か言おうとするが急におどおどし始める。
ようやく口を開いて何か言おうとしたその瞬間に、また電気ショックで体を弾かれる。
少女、立ち上がりながら、

・・・う、うるさい

少女、ハルカがこちらに無反応なのに気付き、段々と緊張が解ける

う、うるさいっ。うるさい！・・・ははっ。うるさいうるさいっ。うるさい～、うるさい！

何度か楽しそうに、そう言うと、段々と本当に感情がこもったような言い方に代わって行く
ちょうどいじめられっ子に限界がきて暴れ出すときのようだ。
そのさなかも、体に電気ショックがあてられる。

うるさい！

少女、息を切らしながら一番大きな声でそう言うと、じっとハルカを見つめる。
救急車は無機質に少女を運んでいく。
救急車のサイレンが段々と大きくなり、それに伴って照明も赤くなる。
段々と空間が「赤」に飲み込まれていく

【2】

場転

ここは警察署の霊安室。

赤い布は長方形に折りたたまれている。どうやらボロボロだった風体をある程度整えられたようだ

怖い怖い怖い怖い。ここすごく怖いです。

警察署の、「霊安室」って言うんですか？ 色々と手続きが終わるまでここにいなきゃみたいなんですけど。なんか、薄暗くて、静かで・・・

こっわ～～。

ていうか、ここって「警察」の冷暗所なんですよね？

無理無理無理無理無理、在りそう、なんか、こう、怨念とか。あと幽霊とか出そう。

・・・いや、でも、そうか。私がもう既に幽霊みたいなもんか。

てことは、もし、ここで幽霊が出てきたとしても、私からしたらそれはもはやただの人で――――それはそれで無理～。事件に巻き込まれた人とかってなんか、怒ってそうだし。

あと私初対面の人との会話得意じゃない・・・。

やっぱ馴れ馴れしいのかな。共通点あるし「君、死因何？ 俺？ 俺毒～ 」「・・・へえ」「珍しいっしょ？」「・・・はは」「君は？ 」「ええ、と事故で・・・」「・・・ふうん。そうなんだ。まあ、なんだろ。あれだね。いいね」「え、あ、はい」あああああ、きっとこんな感じなんだ。聞いといて答えたらなんか微妙な感じになっちゃうんだ。多分死因とかでマウント取り合うんだよお。でなんか死んだことにかけたしょうもないジョークとか言って自分で笑ってるんだあ。

霊安室の扉が開く。

少女、まるで海外ドラマで見る監獄の囚人たちのような言い方で警察官に縋り付く

あ、お巡りさん。出してください～。お願いします～。どうせ聞こえてないんでしょうけど～

言っていると後ろから続いて両親が入ってくる

・・・お母さん、お父さん

両親、少女の姿を見ている。

ああ、もう、目真っ赤だね。どうしたの？ ってそりゃそうか。目も赤くなるかあ

両親が手を撫でているらしく、そこに感覚が伝わる。

久しぶりだなあ。

暖かいとかは分かんないけど、なんか触られてるって感じがする

少女、自分の死体に重なる

ふふ、こうしてると本当に撫でられてるみたい。

少女、撫でられている感覚を楽しむ

・・・覚えてる？ 二年生の時。川。

あの時もハルカちゃんに連れ出されてさ。泳ごうって。二人で行ったんだ。

私、水着持ってなかったんだけど、膝までなら大丈夫って。勢いに負けちゃって。

それで最初はくるぶしのところまで水に入って。冷たい水が気持ちいいねえって。二人で笑い合って。そしたら段々楽しくなってきちゃってさ、次は足首のところまで、次は膝のところまでって。腰のところまで来たときに私足を滑らせちゃって。

ビックリしてるうちにいつの間にか頭の上に丸い石がたくさんあったんだよね。

そしたら鼻の中に水が落ちてきてさ。気づいたら何も分かんなくなって

少女が喋るごとに、その状況を再現するような音響、照明が施される。

目が覚めたら河川敷に寝そべってた。

ハルカちゃんが助けてくれたって、お父さん言ってたね。お母さんは何度もハルカちゃんにありがとう、ありがとうって言ってた。

二人とも、あの時もこんな感じだったね。目を真っ赤にして、お母さんは私の手を撫でて、お父さんは私のことじっと見てた。懐かしい。

少女、立ち上がる。

その瞬間にその場所は霊安室に戻る。

この後なんだっけ？ 化粧してもらえるんだって？

いやあ、憧れてたんだよね。化粧。

でもハルカちゃんとお母さんがまだ早いって言うんだもん。ようやく夢が叶ったよ。

ほら、行こう。

母、まだ少女の死体の手を撫でている

ああ、もう。解ったって。ありがとうね。
ほら、お巡りさんも言ってるから。ね？

両親、警察官に促されて退出する。
その時、少女の死体から母の手が離れ、少女はそれを手に届いていた感覚がなくなったことで実感する。
少女は「あ」、とだけ言い、二人を見送る。
数人大人が入ってきて、少女の死体を運び出す。
霊安室の電気が消え、その扉が閉まる。
それにつられて少女は体を引っ張られる
暗転

救急車の中。とっくに死んでいるのに延命しようとしている大人たちを見て可笑しくなりながら。親友と一緒に川に行った時のことを思い出す。溺れた主人公を助けてくれたらしい。

4場

親友が溺れた主人公を助けてくれたらしい。
大事な記憶らしく。あの時のことは鮮明に覚えているようだ

5場

数時間狭い遺体安置所に閉じ込められた後に体を清められ、死に装束を着せられる。
その後、生前好きだったものと一緒に棺に入れられる。全員的外れなものばかり入れてくるので、また可笑しくなる。彼らが入れたのは、親友が好きなものだった。親友に強くお勧めされて身につけていたものなので、きっと勘違いしたのだ。
そのままの流れでお通夜が終わり、告別式へ

6場

そんなに仲良くなかった人たちが泣いているのを見て気持ち悪く思うが、人の死を悼むこと自体は別に悪くないので複雑な気分になる。
ミュージシャン志望の奴が自分を曲にしたら嫌だなとか考えているうちに、親友の番がやって来る。大泣きしているのを見てなぜか満足しているようだった

三幕

7場

体が徐々に燃えていく。

8場

親友に「バーカ」と叫ぶ